

嘘つきな社長の容赦ない溺愛

目次

嘘つきな社長の容赦ない溺愛

5

番外編 溺愛社長の過去と未来

227

嘘つきな社長の容赦ない溺愛

プロローグ

——先生、先生。悟先生。一体どこにいるんですか？

卒業生の証である桃色の造花を胸につけ、北山小春はひたすら廊下を走り続けていた。卒業式後の最後のホームルームを終えると、写真を撮ろうと待っている生徒たちを残し、いつの間にか姿を消した担任教師の西岡悟。

入学してすぐ恋に落ち、まったく脈はなかったけれど、ずっと一途に好きだった先生だ。

高校を卒業したら、ようやく先生と生徒の関係ではなくなる。いや、元担任と元生徒という立場は一生ついて回るけど、少なくとも見えない倫理の壁は消える。

(卒業式が終わったら……告白して連絡先を教えてもらおうと思ってたのに……)

この三年間で、小春は学校での悟の行動範囲を熟知していた。

彼のいる可能性が一番高いのは、数学の教科担当室。その次が、進路指導室。そこにもいなかったら、職員室か図書室。

いつもだったらとうに見つかっているはずなのに、今日はどこにもいない。

ひしひしと迫る悪い予感を胸に、小春は今朝の悟の様子を思い出していた。

昨夜は、卒業式への緊張と寂しさであまり眠れなかった。

小春が赤い目を擦りながら早めに登校すると、学校は既に別れを惜しむ生徒たちで賑わっていた。校門前では、みんなを出迎えていた悟の周りに、たくさん生徒が集まっている。

「にしー先生、一緒に写真撮ろうよ」

「魂が取られるからいやです」

「きやははっ、いいじゃん」

悟の写真嫌いは有名な話だったけれど、最後なんだからお願いとばかりに生徒たちが周りを取り囲んでいる。

「写真なら、最後に集合写真撮るだろ。今日はそれ一枚しか撮らない」

「にしー先生のケチ！」

「まったく、結局三年間、お前らには『にしー先生』って呼ばれ続けたな。西川先生だつてにしー先生じゃないか？」

「えー、西川先生は西川先生」

屈託なく生徒たちと笑う彼の姿を見られるのも今日で最後だと思つと、小春の目に自然と涙が滲んでくる。卒業したら、今までみたいに毎日会うことはできない。

「あ、小春だー。おはよう小春！」

みんなの輪から少し離れて佇む小春に、同級生が気づいて声をかけてきた。

「おはよう、北山。早いな」

悟に柔らかな笑みを向けられ、涙腺が一気に崩壊した。

「せ、先生……」

いきなりポロポロと涙を零し始めた小春に、同級生たちが慌てて駆け寄ってくる。

「ちよっ、早い！ 早いよ小春！ まだ泣くとこじゃないって」

「やめてえっ、私も泣いちゃう〜！」

笑い声とからかう声が入りまじる中、両手で目をゴシゴシと擦る小春の頭にぼんつと大きな手の平がのった。

大きくて、じんわりと温かい手。今までも何度か、こうして頭を撫でられたことがある。

「北山は感受性が豊かだからな」

「前から思ってたけど、につしー先生さあ、小春にはなんか優しくくない？」

「そりゃあな。北山はお前らと違って、数学ががんばってたし」

「あっ、成績で生徒の扱いに差をつけるなんてー、この不良教師！」

そんな会話をしているうちに、先生方を職員室に集める放送が入った。悟は最後にぼんぼんと、小春の頭を二回叩いてから校舎の方へ戻って行った。

「じゃあな、また後で」

じつと悟の背中を見送る小春の脇を、同級生たちが交互につつく。

「やっぱにつしー先生、小春に優しい気がする」

「小春、先生のことすごい追っかけてたもんねえ。こりゃ、情が移ったか？」

同級生たちに肩を抱かれるようにして教室に入った後も、小春の涙はなかなか止まらなかった。

（やっぱり……先生とこのまま終わりだなんていやだな……）

卒業を機に、諦めた方がいいのかもしれないと悩んだことは何度もある。けれども、そんな簡単に終わらせられる恋ならとつくに諦めていたと思う。

式が終わったら告白して、なんとしても先生の個人的な連絡先を聞き出そう。

小春は、密かにそう決意を固めて卒業式に臨んだ。

けれども——悟は最後のホームルームを終えた後、こつ然と姿を消してしまった。

そしてそのまま彼は、『諸事情により』という納得のいかない大人の都合で、二度と小春や他の生徒たちの前に現れることはなかった。

1

「よし、こんなもんかな」

姿見の前でスーツ姿をチェックしてから、小春は小さく頷いた。それに合わせて、肩のすぐ上で切りそろえたセミロングの髪が揺れる。

白いシフォン素材のブラウスに、身体にフィットした紺色のスーツ。高価ではないけれど、それなりにきちんとして見える万能品だ。これなら、不意打ちで誰かに会っても恥ずかしくない。

(まあ、誰かっていうか……悟先生なんだけどさ……)

自嘲気味に笑い、小春は玄関に向かいパンプスに足を入れた。

高校三年間、大好きだった西岡悟先生。

彼がその後どうしているのか、卒業して四年経った今でも所在はまったくわからない。

母校を何度も訪れ、悟の消息を知っているらしい副担任の西川を問い詰めたが、「もう教師でもない人の連絡先を勝手に教えられるか」と門前払いをくらっている。

「いつか悟先生と、偶然街中で会う日が来るかもしれない」なんて妄想を性懲りもなく繰り返し広げているけれど……そんなドラマみたいなシチュエーションが起こったためしは今まで一度もなかった。

この春、小春は無事社会人となった。

大学を卒業して就職した会社は、大手通信販売会社タンタンライフの本社だ。

三ヶ月の新人研修を無事に終えて小春が配属された部署は、第一志望だった商品開発部。

毎日が、新しく覚えることの連続で余裕なんてまったくない。けれど、やりがいがあった。

就職に合わせて引越した1DKのマンション。大学の時から一人暮らしはしていたけれど、学生と社会人とは生活のペースが随分違う。

就職したばかりの頃は、部屋は散らかり放題で自炊もほとんどできなかったけれど、ようやく生活にも慣れ家事もこなせるようになってきた。

傍目から見れば、充実した社会人一年目を送れていると思う。

けれど慌ただしい日々が紛れて少しずつ悟のことを思い出す頻度が減ってきた。その事実にも、どこか寂しさと言えない焦りを感じる。

マンションの外に出た小春は、ふと澄み切った青空を見上げた。

——悟先生に、もう一度会いたい。

そう強く願っていたら、いつか神様はこの願いを叶えてくれるだろうか。

馬鹿みたいだと思いつつも、小春は半ば本気でそう思っていた。

「おはよう、北山ちゃん」

会社のエントランスに入ると、後ろからぼんつと肩を叩かれた。

振り向くと、同じ商品開発部の先輩・鎌田がにこやかに微笑んでいる。茶色の巻き髪がエレガントに揺れる、雑誌に出てくる今風OLそのもののような人だ。

ベージュの半袖ニットに、同じくベージュのタイトスカート合わせた彼女は、とてもおしやれで眩しく見える。

目鼻立ちも上品で美人な鎌田だが、性格はさっぱりとしていて男っぽいところもあり、実に頼りになる先輩なのだ。

「おはようございます、鎌田さん」

小春が笑顔で挨拶すると、鎌田は周囲を窺いつつこそつと囁いてきた。

「今日、緊急で全社員出席の朝礼があるみたいよ。さつき業務用のスマホに連絡が入ってた」
「へえ……何があったんですかね？」

呑気に答えた小春に、鎌田は眉間に皺しわを寄せて言う。

「やだ、知らないの？ 北山ちゃん。うちの会社の合併話」

「あ、そっか！ え、じゃあ……決まったんですね？」

小春たちの勤めるタンタンライフは、通販業界の中では老舗しほであり大手でもある。けれど、ここ数年はネット専門の通販サイトに押されて経営があまり上手うまくいつていかなかったらしい。

未だカタログ販売に固執する上層部の考えは、古すぎると陰でもしきりに囁ささやかれている。

このままでは経営も悪化していくだろう……と言われていた最中、複数の企業から合併という名の買収話が出ていると噂うわさが聞こえてきた。

経営が悪化しようとも通販業界では老舗しほの会社だ。ネームバリューは相当なもので、それを欲しいと思う企業があるのも頷ける。

この買収の話を、若手社員はどちらかというと好意的に受け取っているフシがあった。だが、入社したばかりの小春はそう樂觀的でもないらしい。

「リストラとか……やっぱり、あるんですかね……？」

「そうねえ。うちの会社、このビルだけじゃなくてセンターとか支社とか色々分散してるじゃない？ もし買収されたら、経営立て直しのために、そういうところから手をつけるかもしれないから、結果的に社員の数が減ることはあるかもね……」

「どうしよう、めちゃくちゃ不安です……」

せっかくやりがいのある仕事ができる会社に就職したのに、こんな短期間でクビになったらたまらない。

「何言ってるの。私たちがみたいな若手社員は大丈夫よ。今や、若手の労働力は貴重なんだから」

あっけらかんと言いつつ鎌田に感嘆した。そもそも商品開発部のホープと言われる彼女なら、リストラの心配など皆無だろう。

「元気出さない、北山ちゃん。あなたなら大丈夫よ」

そう言つて、鎌田は力強く微笑み小春の肩を叩く。

「そうでしょうかねえ……」

小春はため息を吐きつつ、颯爽さつそうと歩く鎌田に続いて商品開発部のあるフロアへと足を踏み入れた。

鎌田の言う通り、出社早々、社員に朝礼参加のお達しがあった。

それからすぐに、契約社員や派遣社員も含めた社員全員が、大フロアに集められる。ある種、異様な雰囲気だ。

「合併の話、どうやらまとまったらしいな」

「大丈夫かなあ、うちの会社」

「このまま古臭い上の連中が仕切ってるよりは、ずっといいんじゃない？」

ざわざわと周囲が話しているのを、小春は不安な面持ちおももちで聞いていた。

鎌田は大丈夫と言ってくれたが、いざこうして社員全員が集められると心配になる。

タンタンライフに就職したことを、一番喜んでくれたのは古くからこの会社の通販を愛用していた母だった。子供の頃からカタログを見ていたから、という安易な理由で受けた会社ではあったけれど、仕事内容はとても興味深かった。最近ようやく仕事の流れを掴めてきて、楽しくなってきたところだったのに。

(できればずっと、この会社でがんばりたいな……)

自分と会社の行く末を思っただけで暗くなっていた時、大フロアのドアが開いた。たちまち周囲の私語がびたりとやむ。入室してきたのは、社長を筆頭とした上層部の面々だ。

高齢の社長は硬い表情のまま壇上になると、おもむろに口を開く。

「えー……本曰、全社員の皆さんに集まっていたいただいたのは……」

入社式でも思ったが、覇気もやる気もない話し方だ。要点のぼけた掴み所のない話を延々と聞かされているうちに、会社の一大事だというのについ眠気が襲ってくる。

「……要するに、会社は合併ではなく買収されたってことですかね？」

ちっとも要領を得ない社長の話に限界が来た小春は、隣の鎌田に小声で話しかけた。すると、彼女は軽く肩を竦めて頷く。

「そうみたいね。全役員の退任を要求されてるんだから。でも社員の待遇は保証してくれるみたいだから、とりあえず私たちは安心していいと思う」

「そっか。よかった……とか言ったらだめですよね」

「いいんじゃない？　ひとまずは」

鎌田が口角を上げ僅かに微笑んだのを見て、小春の胸に安堵が広がった。上層部の方々には申し訳ないけれど、この会社で変わらないうちの業務が気になり始める。

ほっとすると同時に、今日の業務が気になり始める。

確か、午前のうちに業者へ素材確認の電話を入れるよう鎌田に指示されていたはずだ。

(自分の席に戻ったら、すぐに業者に電話をかけなきゃ……)

朝礼はいつ終わるのかとそわそわしていると、社長の長い話がようやく終わって社員たちからはぱらぱらと拍手が沸き起こった。なんで拍手？　と首をひねった小春に、これが社長として社員の前で最後の挨拶だからでしょ、と鎌田が囁く。

「それよりもさ……さっき買収先の社長の画像をネットで見ちゃったんだけど」

「え？」

心なしか、鎌田の目がキラキラと輝いている。

「だから、IT企業大手のインハートウエストの社長よ！　超イケメン！　たぶん、今日来てるんじゃない？」

「はあ……そうなんですか」

タンタンライフの合併には数社が名乗りを上げていたそうだが、ほぼ決まりかけていたのを新進気鋭のIT会社が最後にひっくり返したという話だった。

(インハートウエスト……っていうと、確かスマホのアプリとかゲームで最近すごく注目されてる

会社だよね」

企業の名前に疎い小春でも知っているくらい、有名な会社だ。

しかし目をギラつかせる鎌田とは裏腹に、周りの男性社員たちの反応はどこもなく冷たい。

「IT企業だつてよ。大丈夫なのかあ？ 通販事業に手え出して、他の大手サイトとか海外勢に對抗するつもりなのかな」

「無理だろ。できるわけないって」

「IT企業の社長つてだけで、胡散臭さ半端ないよな」

少なからず嫉妬もまじっているような囁き声に、小春は心底どうでもよくなり天井を見上げた。

「えー、それでは正式発表前ではありますが、先方のたつての希望もあり……本日は次期社長となられる、インハートウエストの西大路社長においでいただいております」

「にしおおじ……なんだか、いかにも由緒正しそうな苗字ですね」

「西大路つて名前、聞いたことない？ ほら、デパートとか銀行とかあるでしょう。その西大路家の血筋らしいわよ、インハートウエストの社長つて」

「えー、すご……つてことは、御曹司ですか？」

「直系ではないらしいけどね」

鎌田がこんなにワクワクしているのも珍しい。よつぽど素敵な人なんだろうな……と思つて小春が大フロアのドアに目をやると、そこから誰かが姿を現すところだった。

「きたきた！」

袖を引つ張られ、鎌田と一緒に入って入り口に注目する。

気難しそうな眼鏡の男を従え、長身の男性がフロアに入ってくる。その男性を見て、小春の目が

まん丸になった。

「え……」

ぽかんと開けた唇から、間抜けな声漏れる。

「ほらほら、超かっこよくない？ あれがインハートウエストの社長、西大路悟よ！」

「にしおおじ……さとる……？」

身体が固まって動かない。ただただ、ゆっくりとした足取りで壇上上がる男性を見つめる。

「皆さん、初めまして。インハートウエスト社長の西大路悟と申します」

うちの社長の挨拶とは打つて変わり、ハキハキとしていて聞き取りやすい、低い声。だらけていた場が、ぴしっと引き締まる。

小春はこの声を、ずっと前から知っていた。

自信に満ちた表情で壇上から社員を見渡しているのは——小春がずっと恋い焦がれてきた高校の担任教師、西岡悟その人だった。

「この度、我がインハートウエスト社はさらなる事業の拡大を目指し、通販業界大手のタンタンラ伊フさんと、手を組ませていただくことになりました」

「え、西大路悟つて……どういうこと？ 西岡じゃないの？」

突然のことに頭がついていかない。何度目を擦つても、壇上にいるのは間違いない悟だ。

(他人の空似ってことは……ないよね。だって名前も同じだし)

教師だった頃から他の先生たちとセンスが違うと思っていたけれど、目の前にいる悟はそれ以上だ。チャコールグレーの細身のスーツに、真っ白いワイシャツと鮮やかなブルーのネクタイ。さすがはIT企業の社長、それら全てが上質で高級そうに見える。

(悟先生……本当に?)

夢だろとかとパチパチまばた瞬きを繰り返してみただけれど、壇上にいる彼は消えない。ただその姿は、小春が知っている悟の姿とは随分違う。

「どうしたのよ、ぼーっとしちゃって。さては北山ちゃん、新社長があまりにかっこいいから見とれるな?」

鎌田に脇をつつかれ、小春は無意識に頷く。

「はい。かっこいいです、すごく」

「へ?」

素直に認めた小春の顔を、鎌田が怪訝けげんそうに覗き込む。

だって、知っているのだ。あの人がどれだけかっこよくて素敵な人かってことを、自分はもうずっとずっと前から――

(も、もしかして!)

悟は教師を辞めた後、結婚してしまったのかもしれない。西大路の令嬢の婿養子に入ったとか――

その可能性を考えただけで、泣きそうになる。

「鎌田さんっ!」

「え、何!？」

突然、纏まとりつくように腕を掴つかんできた小春に、鎌田が身体をこわばらせる。

「あの社長……本当に西大路の御曹司ですか? 西大路のご令嬢と結婚した婿養子とかじゃなくて……?」

「は? いきなり何言ってるの? ていうか、どこから出てきたの、その発想は」

鎌田は急に取り乱した小春にドン引きしつつも、一応答えてくれる。

「ネットで調べた限りだけ……結婚はしてないわよ。ただインハートウエストの社長になる前は、まったく違う仕事をしてみたいだけだ」

「違う仕事……?」

その時、大フロアを盛大な拍手が包んだ。

いつの間にか悟の挨拶は終了していて、彼は四方へ頭を下げて壇上から下りるところだった。

「西大路社長はご多忙のため、本日はこれで失礼させていただきます」

マイクを受け取った社員の言葉に、ハツとする。

今後の経営方針がどうなるのかわからないが、社長なんて本来簡単に会える相手じゃない。現に小春は、入社以来、社長の姿を見たことがなかった。

このチャンスを逃せば、また悟を見失ってしまう。

悟が出て行ったのとほぼ同時に、小春も後ろ側のドアへ走った。

「え、どうしたの北山ちゃん!？」

「ちよっとトイレです！ お腹、お腹痛くてっ」

周囲の人が笑いながら道を空けてくれるのをいいことに、小春は勢いよくドアから廊下へ飛び出す。

廊下に出ると、男性一人を従えた悟の後ろ姿が見えた。

あの姿を、ずっと追いかけてきたのだ。見間違うことなんて絶対にない。

「先生!」

その瞬間、悟の肩が小春にもはつきりわかるくらい、大きく揺れた。ゆっくりと振り向いた悟が、小春の姿を見つけて目を見開く。

「北山……か?」

「悟先生……」

言いたいこと、聞きたいことがたくさんある。駆け寄ろうとした小春の前に、悟の傍らに立つ眼鏡の男性が立ちふさがった。銀縁眼鏡の奥の冷たい視線に怯み、小春の足が止まる。

「社長、この方は」

悟は眼鏡の男性の問いかけに何も言わず、額に手を当て深い息を吐いた。

(あ、この姿は高校時代に何度も見た……)

懐かしさに胸を震わせる小春の前で、彼はすぐに表情をキリリとしたものに戻し、くるりと背を

向ける。

「待って、先生っ」

縦るように悟の背中に手を伸ばすと、銀縁眼鏡の男性に手首を掴まれる。

「社長はお忙しいんだ」

「や、どいてください！ 待って、先生!」

ここで逃してたまるかばかりに再び大声で呼びかけると、悟は面倒くさそうにこちらを振り向いた。

「俺は、先生ではない」

その言葉の冷たい響きに、小春の身体がこわばる。

「……おい、その手を離せ。パワハラで訴えられたらどうする」

悟の言葉に男性が無言で小春から手を離れた。

「先生……」

再び前を向いた悟の背中にもう一度声をかけたが、彼は振り向くことなく足早に去ってしまった。眼鏡の男性がすぐその後を追いつ、小春は彼らの姿が見えなくなるまでじっと見つめ続けるしかなかった。

これまで何度も、悟との偶然的な再会を夢見てきた。

だけど、こんな冷たい再会なんてあんまりだ。ずっと会いたいと思ってきたのに、現実は何十パーターンも妄想していた再会のシチュエーションとあまりに違いすぎた。

再会を喜ぶ間もなく現実には打ちのめされ、途方に暮れる。だがその数秒後、小春は唇を噛みしめて顔を上げた。

「……あつたまきた。何が『俺は、先生ではない』よ」

卒業式の日のホームルーム。生徒たちの前で、俺はいつまでもお前たちの先生だ——などと言ったのは、どこのどいつだ。それならこっちだって、もう生徒でなんていてやらない。

「こうなったら、何がなんでも先生を落としてやる……！ 乙女の三年間……いや、七年間の想いを舐めんよ！」

いまさら大フロアに戻る気にもなれず、小春は誰もいない廊下をトイレに向かって歩きながら、両方の拳をきつくきつく握りしめた。

異例の朝礼の後、各部署のあるフロアにはどこか落ち着かない雰囲気ムネが漂っていた。

そんな中、小春は溜まっている仕事を一心不乱に片付けていく。

これからについて、考えたいことがたくさんある。そのためには、なんとしても昼休みまでに、自分が抱えている作業を終えてしまいたかった。

「どうするー？ お昼、気分転換に外に出ようか？」

部署のみんながぞろぞろと退室していく中、小春は一人デスクに残った。

「北山ちゃん？ ランチ行かないの？」

「あ、今日はそこでパンを買ったので」

いつもランチは外に出ることが多いのだが、今日は移動販売のパン屋からパンを買い込んできた。そうしてまで昼休みに社内に残るのには、もちろん理由がある。

人もまばらになったフロアのデスクで、小春はパンにかじりつきながら、バッグから自分のスマートフォンを取り出しネット検索を始めた。

検索するワードは、もちろん『西大路悟』だ。

今の時代、なんでもネットで情報が探せる。早速『西大路悟』で検索してみると、膨大な量の情報が引っかけた。

西大路家というのは、大手デパートや銀行などを幅広く手がける大グループの創業者一族で、どうやら悟はその縁者らしい。一族の直系ではないようだが、それでも十分にすごい。

新進気鋭のIT企業社長、しかもイケメンということもあり、ネット上には彼の特集記事もいくつもあった。

『大学卒業後、数年間は教育現場に従事し、三年前に西大路家に戻りグループ企業グループの役員に就任。その後、IT事業に特化したインハートウエスト社を設立』

詳しい事情までは書かれていないが、情報としては充分だ。

（つまり先生は、西岡悟という名前で身分を隠して教師になり……その後、ホントの自分に戻って事業を興おこしたってこと？）

でも、どうしてだろう。会社や将来のために教師をしていたとは思えないし、やっぱり謎が残る。小春はWebサイトを閉じると、スマホの写真フォルダを開いた。今も数日おきに眺める写真

フォルダには隠し撮りした悟の写真がたくさんあって、中に一枚だけカメラ目線の写真がある。

というか、隠し撮りしようとしていたら偶然こちらを向いたのでカメラ目線になった、という偶然のたまものだ。

改めて見ても、悟の雰囲気はどこか他の教師たちと違っていた。くたびれたスーツやジャージ姿が当たり前の校内で、悟はどこかおしやれで洗練された雰囲気を持っていた。

（あれって、元々の育ちのよさが滲み出たってことなのかなあ……なんたつて、御曹司さんもね）

高校生の小春にも、他の先生とは違う彼の品の良さみたいなものはなんとなくわかった。それは、好きだから特別に見えるという理由だけではなかったらしい。

高校の時は、先生と生徒という絶対に崩れない強固な壁が二人の間にあった。でも卒業した今は、自分のがんばり次第で、どうにかなるんじゃないだろうか。

社長と社員という垣根はあっても、倫理的にはなんの問題もない。

「そう考えたら、なんか燃えてきた……」

ニヤリと呟いた小春の背後に、誰かが立った気配がする。

慌てて振り向くと、そこにはランチから戻った鎌田が顎に手を当てて立っていた。

「あ、鎌田さん、おかえりなさい」

「ふーん、燃えてきたって……仕事に？」

独り言を聞かれていたとは思わず、小春は曖昧に頷きこの場を誤魔化そうとする。

「えっと……はい。そんなところです」

「やる気あるわねえ。ランチをデスクで取るくらい、北山ちゃんが仕事に燃えてるとは知らなかったわ。だったら、もっと仕事を任せてもいい？」

は？ と固まった小春のデスクに、どさどさと書類が置かれていく。

「新人だからって、甘く見すぎてたわ。ごめんね、北山ちゃん。開発部のモットーは『実力のある人はどんどん上へ』よ！ というわけで、この資料全部に目を通してもらえる？ 次回のカタログの目玉になる商品を見つけて、特集記事を作るのを手伝ってほしいの」

「えっと……」

「わからないことがあったらじゃんじゃん聞いてね。北山ちゃんがやる気あるって言ってくれて、すごく心強いわ」

鎌田の感心しきった眼差しに、何も言えなくなる。

まさか、社長に近づく方法を探して燃えてました、なんて言えるわけもなく。

「……はい、がんばります！」

膨大な書類を前のため息を堪えた小春は、空元気で返事をした。

「学生時代の私って……暇だったんだなあ……」

数日後、小春は栄養ドリンクを片手に会社のデスクに突っ伏していた。

鎌田に割り振られた作業は予想以上に多く、同時にとてもやりがいのある仕事だった。本来であ

れば新人に任せる仕事量じゃない……と他の先輩に同情されたことが、逆に小春のやる気に火をつけ、気づけばこのところずっと残業続きたたりする。

今まで通りの雑用をこなしながらの作業は思いのほか大変で、あつという間に終業時間が過ぎてしまう。

（今まで残業が少なかったのって、鎌田さんが私の仕事量をセーブしてくれてたんだろうな……）
社会人として改めて身の引き締まる思いだが、せつかく再会できた悟に対してなんのアクションもできずにいる状況は歯がゆい。

高校の時はあの手この手でアプローチを繰り返して、明日はどう話しかけよう、校内のどこで会えるだろう……と思考を巡らせるのが日課だった。

高校の時の自分は、なんて暇で幸せだったのだろうかと思ってしまう。

ようやく悟の所在がわかったというのに、彼に近づくとどこか動向すら掴めずにいる。会社にいる以上、仕事が一番なのは仕方がないけれど、彼に近づくとどこか動向すら掴めずにいる。会社にいる以上、仕事が一番なのは仕方がないけれど、焦れたさも限界だった。

「北山さん、まだやってるのか？ そろそろ終わりにして帰ったらどうだ」

少しでも自分の時間を作りたくて躍起になって仕事をしていた小春は、課長に声をかけられ顔を上げた。いつの間にか、フロアには課長と小春の二人きりになっている。

「あれ、全然気づきませんでした……」

鎌田が一緒の時は遅くならないよう小春の勤務時間を配慮してくれているのだが、彼女は午後から外回りに出かけていてそのまま直帰だった。いつも声をかけてくれる人がいないため、仕事に没

頭しすぎて時間を忘れていたようだ。

「ものすごく集中していたからな。ただ、もう二十三時を過ぎてる。その辺にしておかないと、帰ったら日付が変わってるぞ」

それはさすがに明日が辛いし、自分が帰らなければ課長も帰れないだろう。小春は急いで帰り支度をする、書類のチェックをしている課長に頭を下げた。

「遅くなってしまってますみません。お先に失礼します」

「ああ、気をつけて帰れよ」

残業でここまで遅くなったのは初めてだ。

フロアを出て廊下に出ると、社内には既にほとんど人影がなかった。一度ロッカールームに寄った後、エレベーターホールで、ぼんやりと扉が開くのを待つ。

最上階に停まっていたエレベーターが下りてくるライトを眺めながら、小春はふと昼間に鎌田から聞いた話題を思い出した。

『今日は新社長来てるみたいよ。さつきエントランスで見かけちゃったよ』

外出先からウキウキした様子で戻ってきた鎌田の言葉に、小春は作業を止めて顔を上げる。

『社長って……西大路社長ですか？』

『もちろん。周りに人がたくさんいるから、遠目から眺めるだけだったけど。一人だったら話しかけに行くのになあ』

残念そうな様子の鎌田に、無意識にほっとしている自分がある。

人目を引く華やかな顔立ちと、メリハリのあるボディで男性社員に人気のある鎌田だ。もしかしたら悟も、彼女に惹かれてしまうかもしれないと焦ってしまった。

世の中をはじめ、この会社の中にも魅力的な女性はたくさんいる。そうした女性たちも、鎌田のように悟に近づきたいと思っているかもしれない。

仕事忙しいなんて言っていて、自分が何も行動を起こせずにいる間に、別の女性が悟に近づいてしまったら。それどころか、既に彼女がいたりしたら……。そう考えると、言いようのない焦りと不安が込み上げてくる。

(最上階の社長室に、先生がいたりしないかな……)

前社長は高齢だったこともあり、あの朝礼の後すぐに退任を決めたと聞いた。書類上はまだ社長らしいが、既に権限は全てインハートウエスト社に移っているようだ。

もし社長室に誰かいるとするなら、それが悟である可能性は高い。

迷った末、小春は来たばかりのエレベーターに飛び乗り、最上階のボタンを押した。

(新人だから間違えちゃって……っていう言い訳は、まだギリギリ使えるかな?)

無謀なのは充分わかっている。だがこのまま何もせずに、また会えなくなるのだけはいやだった。チン、と軽やかな音を立ててエレベーターが最上階にたどり着き、ゆつくりと扉が開く。エレベーターホールに誰もいないことにまずほっとした。

辺りを見回しながらエレベーターを降りると、壁には絵画が飾られ通路の角には高級そうな花瓶が置かれている。最上階だけあってなんとなく高級そうな雰囲気だが、正直古臭くて趣味も悪い。

恐らく、前社長の好みだろう。

(こういうの……悟先生が正式に社長になったら、あつという間に撤去されそう)

そんなことを考えつつ、しんと静まり返った廊下をそろそろと進む。副社長室、秘書室、といくつかの部屋の前を通り過ぎ、廊下の一番奥に社長室を見つけた。

さすがにこんな遅くまで残っている社員はいないのか、どの部屋からも人の気配は感じられない。足音を忍ばせつつ社長室の前にたどり着き、小春は重厚そうなドアの前で深呼吸をした。

誰にも会わずに済んだのにはほっとしているけれど、これで悟にも会えなかったら残念だ。再会したあの日以来、まだ一度も悟に会えていない。

(今日は会社に行ったことは……先生は日中、ここで仕事してたってことだよ)

キョロキョロと辺りを見回して誰もいないのを確認した小春は、ぺたりと社長室の扉に身体を預けてうつとりと目を瞑った。

この四年間、悟がどこで何をしているのか、それどころか生きているのかどうかすら不明だった。それを思うと、たとえ今は不在でも、彼がここにいたという事実が胸が熱くなる。なんだか悟の気配が残っているような気さえしてきた。

(このドアノブにだって、絶対に触っているはず)

そう思いながら、鈍い錆色に光るドアノブにそっと手を触れた。当然、冷たい金属の感触しかないけれど、そんなことはどうだっていい。

悟が触れたドアノブに、今自分も触っている。その事実が嬉しい。

扉を開ける悟の姿に自らを重ね、ドアノブを回そうとしたところ――
「……何をしている」

低い声が背後から聞こえて、小春はびくつと全身を震わせた。

(でも、この声は……)

ギギギ、とロボットのようにぎこちない動きで振り向くと、予想通りの人がすぐ後ろに立つてくる。

「せ、先生……！」

嘘みたいだ。あれほど会いたくてたまらなかつた人が、目の前にいる。

しかし感激で目を潤ませる小春に、悟の氷のように冷たい視線が突き刺さる。

「一体、何をしていると聞いている」

「いえ、その……もしかしたら、先生がいるかもしれないって思ってた」

どうしても先生に会いたいと思つたら止まらなくなつて、という言葉が呑み込む。

高校の時は素直に口に出せていたはずの言葉が、喉の奥に引っかかつて出てこない。それくらい、目の前の悟は、小春の知っている悟とは別人のようだった。

「このフロアがどういう場所なのか、社員のお前が知らないわけじゃないよな？ 社長室のある役員フロアだぞ。他の階より監視カメラを含め警備が厳しいとは、考えなかつたのか？」

「あ」

指摘され、さつと血の気が引いていくのがわかつた。

監視カメラに忍び込んだ自分の姿が映つてしまふなんて、考えもしなかつた。落ち着いて考えれば、こんな時間に新人社員が不自然に役員フロアをうろついていたなら、それだけで由々しき問題だ。「ど、どうしよう。せつかく先生に会えたのに、私クビになるんでしょうか……」

青くなつた小春に、悟が心底呆れた様子でため息を吐く。

「今日はまだ、正式な出社日じゃないから防犯カメラは入れてない。だが、それくらいは考えろ」

ほつとしたのも束の間、悟はさらに冷たい目で小春を見据える。

「社会人として、浅はかな行動をするな」

「……………っ！」

冷たい言い方に、胸をぎゅつと掴まれたような苦しさを感じた。

小春を見下ろす視線には、元先生が元生徒に向ける親しみなど微塵も感じられない。

「申し訳……ありませんでした……」

小春はもたれていた扉から身体を離し、頭を下げた。

どう考えても自分が悪く、非常識な行動を取つたことを詫びねばならない。けれど、それ以上に込み上げる感情があつた。小春は勢いよく顔を上げてキツと悟を睨みつける。

「久しぶりの再会だつていうのに、随分と冷たいんですね？ 先生」

「……俺は先生ではないと前にも言つたはずだ」

「あー、そうですね。確かにそう言つてました。まったくもつてその通りです！」

教師の頃とは違う悟に怯みそうになるが、こんなことでめげるくらいならそもそも七年も想い続

けていない。

「先生じゃないって言うなら、私だってもう生徒じゃありません！」

「……は？」

そう宣言した小春に、悟が僅かに片眉を上げる。

「もう先生と生徒の関係じゃないんだから、何を言われたって引きませんしめげません。覚悟してください。私、絶対にあなを落としてみせますから！」

面と向かつてはつきり言うど気持ちがつつきりした。そんな小春を見て、ずっと別人のような冷たい顔をしていた悟の表情が微かに変化する。

数秒の沈黙の後、悟の口角がほんの少し上がった。

「……相変わらずだな。お前は」

堪えきれずに思わず漏れてしまった、みたいな微笑み。その表情は高校の時の悟そのもので、小春の胸が大きく鳴った。

「せん……」

一瞬にして舞い上がりかけた小春を、冷たい顔に戻った悟が現実引き戻す。彼は小春の肩を押して社長室の扉から遠ざけた。

「二度とこんな時間にうろつくなよ。今日はたまたま忘れ物をしただけで、こんな偶然はない。それに、あと数日もすればこの防犯カメラも動くようになるからな」

「はい……」

小春は目の前にいる悟を見上げた。ようやく会えた妄想でない彼の顔を、じつくりと目に焼き付けておきたくて。

「仕事が終わったのにこんなところをうろついていたと知られたら、お前の上司の立場もまずいぞ。わかったなら、早く帰れ」

悟はそれだけ言うと、こちらを見ることなく社長室の中に入って行った。ボタンと閉まった扉の前で、小春はしばし立ち尽くす。

姿を見られればいいと思っていたのが、会話までできた。けれど、悟はもう小春が知っている『先生』ではない。

嬉しさと寂しさがごちゃ混ぜになってどうしていいかわからなかった。けれど、とにかく今は早く帰ろうとエレベーターホールに向かう。急いでエレベーターに乗り込み扉が閉まったところで、ほっと肩の力を抜いた。

悟に会えたのはラッキーだったけれど、彼の言う通り、もし警備員や他の社員に見つかっていたら——不審者扱いされるだけでなく、部署の上司にまで迷惑をかけていたかもしれないのだ。

学生の時みたいに、勢いだけで動くことはもうできない。同じ会社なら気軽に近づけると思ったけれど、社長に接近するのは難しいとよくわかった。

幸い誰にも会わずにロビーまで降りると、思ったよりも時間が過ぎていた。家に着く頃には日付が変わっているだろうけど、なんだか心も身体も軽やかだ。

外に出て見上げたビルの最上階には、まだ灯りのついている場所がある。

(あそこがきつと、社長室だよね……)

あの灯りが消えるまでこの場に留まっていたいけれど、きつと悟はそれを望まない。高校の時から一歩間違えばストーカー？ と同級生たちに笑われていた小春ではあるが、実際は明確な線引きがあつて「先生にだめと言われたらやらない」と決めていた。

せつかく会えたけれど、悟が「早く帰れ」と言うのなら大人しく帰ろう。

またすぐに会えますようにと社長室に向かつて手を合わせてから、小春は駅に向かつて歩き出した。

『瞳ひとみ…えっ、マジ？ 小春、とうとう西岡先生のこと見つけたんだ！』

帰宅して高校時代の友人である瞳にメッセーリアプリで悟との再会を報告すると、すぐさま返信があつた。

『瞳…さすが、学校一の西岡ファン。執念だね』

大学生になつても彼氏を作らない小春にほとんどの友人は呆れていたけれど、瞳は「そんな風に好きになれる人がいるのもいいんじゃない？」と唯一肯定してくれた友人だつた。悟と再会したことを誰かれ構わず話すつもりはないものの、瞳にだけは報告しようと思つたのだ。

『小春…執念じゃなくて運命だよ！ だって先生、ウチの会社の社長として現れたんだよ？』

『瞳…あー、はいはい。そうだね運命、運命』

そう言つて、軽くあしらわれる。だが、瞳のこんな反応はいつものことなので慣れっこだ。

『小春…でもさ、正直言うと……高校の時と違って、どうやって先生に近づけばいいのかからないんだよ。相手は社長だし、接点がなさすぎる』

『瞳…あの顔とスタイルで社長なら、高校の時以上にライバルも多そうだね』

そうなの、と小春はスマホを握りしめてウンウンと頷く。

『瞳…でもさ、どこにいるかわかんなくて、この広い日本でただ再会を夢見るしかなかった時より、ずっといいじゃん？ だって、存在が確認できるんだから』

『小春…そうだね。ホント、そう思う』

『瞳…それで先生、結婚はしてなかったの？』

『小春…大丈夫だつた！ 私も気になつて調べてみたんだけど、独身だつたよ』

『瞳…そっかあ、それなら付き合うのも可能なんだね』

言われて、ハツとした。

『小春…そうだよ。そうなんだよ……私、先生の彼女になりたい！』

『瞳…何それ、いまさら？』

スマホの向こうから、瞳の笑い声が聞こえてきそう。

『瞳…まあとにかく、がんばりな』

『小春…うん……がんばる！ ありがとう』

メッセーリアプリを終わらせた小春は、スマホを胸に当てて深く息を吐いた。

改めて提示されたことで、はつきりと自覚する。

(そうだ。私、先生の彼女になって……堂々と隣にいたい)

小春は、こうやって誰かに背中を押してもらいたかったのかもしれない。他愛のない一言でもい
いから、応援されていると思いたかった。

ばふりとベッドに倒れ込み、1DKの小さな部屋を見回す。この部屋に先生が訪ねてくる……な
んで妄想をした回数は数知れない。でも、彼と付き合うことができたなら、妄想じゃなくなる。

(高校の先生と会社社長って……どっちが高望みなのかなあ。でも落とすって宣言しちゃったしね
とりあえずは、先生に女として見てもらわなくちゃ)

そう決意を固め、小春は明日に備えてそつと瞼まぶたを閉じた。

2

翌朝。いつもより早く家を出たせいか電車に少しだけ空席があつた。小春はそこに座りポケット
からスマホをとり出す。

高校を卒業してから四年。機種変更をする度に、悟の写真だけは新しい機種に移動させてきた。
そのため、どのスマホにも彼専用のフォルダがある。そこに収められた隠し撮り写真をうつとりと
眺めながら、昨夜のことを思い出した。

友人の瞳には悟との再会を運命だと言ったけれど、さすがに小春もそこまでおめでたくはない。

ただ、すごく運が良かったとは思っている。

しかしこの先、昨日みたいな偶然を待っているだけでは、今の彼には近づけない。

学校に行けば必ず会えた昔とは違う。なぜなら今の彼は、同じ会社にいても顔を見ることが難
しい社長なのだから。

話ができればラッキー、二人だけで話せたらかなりラッキー。そう思っていた昔に対し、姿を見
られるだけでもものすごくついているというレベルでは、過去よりさらに状況が悪化していると、
思わず苦笑が漏れた。

それでも瞳が言っていたように、まったく消息がわからなかった時に比べたらずっとマシだ。

そんなことを考えているうちに駅に着き、小春は人混みに流されながら会社に向かう。数年前に
新築されたという十階建てのオフィスのビルの前で立ち止まり、最上階を仰ぎ見た。昨夜、灯りがつ
いていた窓は、ギラギラと太陽の光を反射してすぐに直視できなくなる。

同じ建物とはいえ、あそこまでの道のりは随分遠く感じられた。

「おはよう、北山さん。がんばってるね」

一番乗りで出社した小春が書類の整理と郵便物の仕分けをしていると、次いでフロアに入ってきた
部長に声をかけられた。

「おはようございます」

「朝一番で見るのが北山さんとは、今日はラッキーだなあ。あ、こういうのはセクハラになるん

だったか」

がははっと楽しそうに笑う部長に愛想笑いを返しながら、悟ともこんな風に接点があったらよかつたのになあ、と内心で思う。

「最初の頃に比べて書類のミスも減ってきたし、業務にも慣れてきたね。だいぶ社会人としての自覚が出てきたんじゃないか？」

「あ、ありがとうございます」

部長からの思いがけない評価に、小春は驚いて頭を下げる。

この部署に配属されてすぐ、元氣と愛想はいいけれどミスが多い、と指摘されたことがあった。

あの時はショックで落ち込んだけれど、改善しようががんばってきたかいがあつたと素直に嬉しい。結構結構、と笑顔で頷きながら部長が自分のデスクについた。

そこでふとひらめき、小春は部長に問いかける。

「あの、部長。ひとつ質問してもいいですか？」

「ん？ なんだ？」

「上司としては、やっぱり部下が仕事を一生懸命がんばっていたら嬉しいですか？」

「そりゃあ嬉しいに決まってるよ。自分の部署の部下っていうのは特別可愛いもんだしな。部下にやる気があるのは結構なことだし、それが伝わってきたら目をかけてやりたくなる」

「なるほど」

同じ部署の部下ではないけれど、社長にとって社員は全員部下みたいなものだろう。だとしたら、

小春が必死に仕事に打ち込んでいたら、悟の目に留まる確率が上がるのではないか。

顎に手を当てじっと考え込む小春に、なぜだか部長がコホンとわざとらしい咳払いをする。

「き……北山さん、俺に個人的に喜んでほしいのかい？」

「あ、すみません、まったく違います。それは別の話です」

「……ああ、そう……」

「おはようございます。あら、北山ちゃん早いわね！」

軽快な足取りでフロアに入ってきた鎌田が、肩を落とす部長と小春へ爽やかに挨拶してきて。

「おはようございます！ 鎌田さん」

「あれ、部長どうしたんですか？ なんか複雑な顔してますけど」

「いや、なんでもないよ……」

「そうですか？ それならいいんですけど」

鎌田は不思議そうにしながらも、デスク周りを整えて仕事の準備を始めていく。

小春はその様子を眺めつつ、もし自分が彼女のような若くしてホープと言われる存在だったら、社長の目にも留まりやすいのにとあってしまう。

「北山ちゃん？ どうしたのよ、じつとこっち見て」

「……なんていうか、……もし、学校の先生に好かれないと思つたら、勉強をがんばりますよね？」

「いきなりなんのたえ話？」

鎌田は呆れた顔をしつつも、小春の話に耳を傾けてくれた。

「まあ、先生に好かれないと思うなら、いい生徒になるのが一番よね」

「じゃあ、会社の偉い人の目に留まりたいと思つたら、仕事をがんばるのが一番ですか？」

「は？」

鎌田は怪訝けげんそうに眉を寄せて、ちらりと部長に目をやった。

「まさかと思うけど……北山ちゃん、部長に好かれたいの？」

「ええ、ち、違いますよっ！ そりゃあもちろん、部長や鎌田さんにも認めてほしいですけど！」

部長は愛妻家だし、子供もいる。おかしな誤解をされては困ると慌てて首を横に振った。

「なら、会社の偉い人って誰のこと？」

「うんうん。そこは上司としても気になるね」

いつの間にか部長も会話に入ってきている。小春は一瞬どうしようかと迷ったが、隠すことでもないかと素直に打ち明けた。

「社長です。私、新しく就任した社長に認めてもらいたいんです」

それを聞いた二人は、驚いた様子で顔を見合わせた。

「え。冗談でしょ？」

窺うかがうような鎌田の問いかけに、きつぱりと答える。

「いえ、本気です」

二人は無言で小春を凝視していたが、そのうち部長がふっと噴き出した。

「あはは、そっかそっか。いやいや、志こころが高いのはいいことだ！ それに……IT企業の社長

だつたら、きつと年功序列なんて言わないだろうしな。やる気があつて実力のある社員こそ、もつと上に行くべきだよ。うんうん」

どうやら、冗談だと思われてしまったようだ。

「社長に認めてほしい、ねえ……。そりゃまた随分と大きく出たわね」

面白そうに笑う部長とは違って、鎌田はどこか呆れ顔をしている。

「おかしいですか？ そんな風に考えるの」

「うーん、おかしくはないわよ。確かに仕事をがんばってそれなりの成果を上げられたら、社長に認めてもらえるチャンスだつてあるかもしれない。でも北山ちゃんみたいな新人が、仕事でそれだけ

の成果を出すのって難しくないかしら」

「う……それは、その通りなんですけど……」

「しかも、北山ちゃんが認めてほしいのはあの西大路社長でしょ？」

「はい、そうです」

勢いよく頷く小春に、ばかねえ、と言つて鎌田がため息を吐く。

「西大路社長がいつまでもうちの会社にいるわけがないじゃない。彼の社長職は、買収後の社内が

落ち着くまでの一時的なもので、すぐに別の人が社長に就任すると思うわよ？」

「ええっ……そうなんですか!？」

「普通、そう思うでしょ」

当然とばかりに言われ、小春は驚きで目を丸くした。そんなこと、考えもしなかった。

41 嘘つきな社長の容赦ない溺愛

「あんなにデキる人が、一子会社にずっと留まっているわけじゃない。次期社長に相応しい人が見つかったら、とっとと退任すると思うわよ。むしろもう人選はできて、準備を進めているんじゃないかしら」

(そんな……)

そうなったら、悟に会える機会すらなくなってしまう。

「北山ちゃんが社長を気にする気持ちはわかるけどね。カリスマ性のあるイケメンだし♪」

鎌田が気落ちした小春の肩をぽんぽんと労るように叩いた。

コツコツがんばっていつか認めてもらおう、なんて悠長なことを言ってる場合ではなくってしまつた。これは、なんとかして彼に会う機会をもっと作らなければいけない。

「まあでも、社長のために仕事をがんばるなんて素晴らしいじゃないか。社長に会った時には伝えようよ」

「えっ、部長は社長とお会いする機会があるんですか？」

勢い込んで尋ねる小春に、部長はゆっくり首を横に振った。

「いや。就任の挨拶以来、見かけたことはないけどね」

それなら、小春と大して変わらない。

「機会があれば……よろしくお願いします」

力なく笑って自分のデスクに向かうと同時に、心の中でふつふつ闘志が沸き上がってきた。

(なんとしても……同じ会社にいる間に、社長を落とさなきゃ！)

「それじゃあ、北山ちゃん。これ、今日の作業ね。がんばって、いつか社長に認めてもらえたらいいわね！」

鎌田がデスクに置いた資料の量に引きつりながら、小春は胸の奥で闘志を燃やしていた。

「北山さん、お使い頼まれてくれない？」

部長に声をかけられ、小春はモニターとにらめっこしていた顔を上げて勢いよく返事をした。

「はいっ行きます！ どこですか？」

「営業部にサンプルを届けてほしいんだ。新商品のプロトタイプ、一度見てみたいと言われたのを忘れてたよ」

営業部は、小春のいる商品開発部より二階下の三階フロアにある。社長室のある最上階ではなかったことを残念に思いながらも、すぐさま立ち上がる。

タンタンライフ本社の部署は細かく二十以上に分かれていて、十階建てのビル内でもかなり入り組んで配置されていた。だが小春はその全てをすっかり頭に入れている。

「わかりました。行ってきます」

「あ、そのついでに、総務へ寄って赤ボールペンの替え芯五本とゼロテープをもらってきてくれるかな？」

すかさず他の人から雑用を頼まれた。総務部があるのは六階。ついででもなんでもないけれど、これも快く引き受ける。

「了解しました」

通常業務で、社長室へお使いに行くことなど皆無だ。つまり、同じ会社においても相変わらず悟とは会えずにいる。

しかし、どこにチャンスがあるかわからない。何事も前向きに捉えて、とにかく行動あるのみと決めていた。

部長からサンプルを受け取った小春がフロアを出ようとしたところ、背後から鎌田の容赦ない声が飛んできた。

「また行き先を間違えるんじゃないわよー。『方向音痴の北山さん』」

(う……)

これは絶対にバシてる、と小春は振り向かず胸の辺りを手で押さえる。

実は雑用でお使いを頼まれる度に、間違えたフリをして最上階に行っていたのだ。

(まあ、その都度、秘書課のお姉さま方に見つかって笑顔ですごまれているんだけど)

優雅に微笑んでいる彼女たちの目はまったく笑っておらず、通してもらえた試しがない。そんなことを繰り返しているうちに『方向音痴の北山』という通り名がついてしまった。

(いや、方向音痴で済ませてもらえているなら、まだセーフだよ)

残業帰りの深夜、誰にも見つからずに社長室の前まで行って悟に会えたことは、本当に奇跡だったと、いまさらのように思い知る。

小春みたいな新人が社長に接するチャンスは、限りなくゼロに近いのを痛感しながら、営業部の

フロアに入っていた。

「商品開発部の北山です。新商品のサンプルをお持ちしました」

大人しく営業部に直行した小春は、事務担当の女性社員にサンプルの入った紙袋を渡した。母親ほどの年齢の女性社員がそれを受け取りながら、気の毒そうに小春を見てくる。

「ご苦労様。商品開発部のお使いは、いつも決まってあなたねえ。新入社員だから仕方ないかもしれないけど、たまには別の人に代わってもらいなさいよ」

女性社員から同情に満ちた眼差しを向けられて、慌てて首を横に振る。

「いえ、大丈夫です！ 私、お使いをしたくてしてるんですから」

強がっていると思われたのか、そと手の平に飴玉を載せられた。彼女には、来る度にこうしてお菓子をもらっていて、逆に申し訳なかつたりする。

お礼を言って営業部を出た小春は、そのままエレベーターで六階に上がり総務部に寄った。頼まれた文房具をもらい商品開発部へと戻る。行きがけに鎌田から釘を刺されたこともあり、さすがに寄り道はしなかった。

(会社以外で何か、先生に近づく方法を探した方がいいかもしれない……)

そんなことを考えながらフロアに戻ると、待ち構えていたように同僚たちが一斉に小春を見た。

「あ、戻ってきた」

「え……もしかして私、何かやらかしやいましたか？」

最近はずいぶんミスも減ってきたけれど、何か抜けていたのだろうか。焦って自分のデスクに

戻った小春に、部長が笑いながら首を振った。

「ああ、いやいや。北山さん、社長に認められたって言うていただろ？ その意欲を買って、ひとつ仕事をやってもらおうかと思って。データ送っておいだから、見てみて」

コンコンとモニターを指さされ、急いでノートパソコンを開く。小春のアドレスに送られてきたのは、新商品開発プロジェクトと書かれた文書だった。

「うちがインハートウエスト社の傘下に入って、新たに立ち上げるデジタルカタログの目玉商品を考える企画だ。メインターゲットは今までの三十代以上じゃなく、十代から二十代前半の若者となる。ネットでの購入がメインになるから、それに合った新商品の開発、もしくは発掘をしてほしい」

「デジタルってことは、紙のカタログはやめるんですか？」

毎回カタログが届くのを楽しみにしていた母を思うと、少し複雑な気持ちになる。

「それは上層部が決めることだから、まだなんとも言えないな。ただ今回のデジタルカタログは若者をターゲットにしているから。試験的な意味合いを含めて、Webとアプリのみでの展開らしい」

「うちの部署で二十代前半って言ったら、北山ちゃんしかいないからねー。どう、やる？」

みんなからの視線を受けつつ、小春は即答した。

「やります！」

悟に認めてほしい気持ちももちろんあるが、初めて任された大きな企画に嬉しさが込み上げる。

小春の返事に、部長が満足げに頷いた。

「そう言うと思ったよ。じゃあひとまず、一週間以内に企画書をまとめて提出してね」

「一週間……」

こういった企画の作業には慣れていないから、一週間が長いのか短いのかよくわからない。けれど、やるしかない。

「追加の資料も全部送っておくよ。パソコン上で動かせるアプリのベータ版ももらってるから、それを見てまずはイメージを掴んでみて。わからないことがあったら、鎌田さんに聞いてね」

「はい！」

「普通なら新人には回ってこない仕事よー？ 北山ちゃんのやる気を買われたんだから、がんばってね！」

ニヤリと笑いながら、隣の席の鎌田が小春の肩を叩く。他の先輩たちにも次々と応援の声をかけられ、そのことが素直に嬉しかった。

自分にとっては、かなり大きなチャンスだ。悟のそばに行くために、ほんの一步でも前進するきっかけになるなら、全力で打ち込みたい。

「私、がんばります！」

部署のみんなの期待と自らの野望のために、小春は声高に宣言した。

が、しかし――

部長からひとまずの企画書提出期限と言われた日を控えたある夜。

「あー……うー……」

定時をとくに過ぎたフロアで一人、小春はパソコンとにらめっこをしながらうめき声を上げていた。小春を気にしつつも、部長は娘の誕生日だから、と帰ってしまい、つい先ほどまで残っていた鎌田も『用事があるから、ごめんね』と言って帰ってしまった。

北山ちゃんも帰るよ！ と散々急かされたが、このまま家に帰っても落ち着かない……と鎌田に泣きつきなんとか残業することを許してもらったのだ。

新企画に対し、どうにかなるだろうと甘く見ていたのは否定できない。

ファッションが主流の若者向けネット販売。そこへ雑貨に強いタンタンライフが乗り出すのだから、まずは世間の注目を集められるような目玉商品を開発、もしくは発掘する、というのが今回の企画の趣旨だ。膨大な資料とカタログに埋もれながら、小春は再びうめき声を上げる。

うちでしか扱っていない商品はたくさんあるし、それをカタログから探すのは簡単だ。けれど、そんなことは誰にでも思いつくのではないか、と悩み出し行き詰まってしまった。

人脈も情報量も他の社員より圧倒的に劣る小春が、商品の発掘をするのは難しい。だからといって、商品を一から開発するほどのアイデアもなかった。

日に日に本当にできるのかという不安が大きくなってきて、そんな小春を周りが心配しているのを感じる。経験不足は否めない。けれど、やっぱりできませんと匙を投げるのもいやだった。

一向に見えてこない答えに、小春はため息を吐いた。結局、残業をしたところでダラダラと時間

ばかりが過ぎていく。

(もう帰ろうかな……)

ついそんな後ろ向きな気持ちになり、小春はぶんぶんと頭を振った。そして、椅子から立ち上がると両手を上げストレッチをして、気持ちを切り替える。

頼み込んで残業をさせてもらっているのだから、何かヒントだけでも掴まなければ申し訳ない。

もう一度、過去のカタログを漁ってみようか……と思った時、フロアに誰かが入ってくる気配がした。何気なく後ろを振り向いた小春は、直後、ぴたりと動きを止める。

てっきり他の部署の人だと思っていたのに、そこにいたのは、ずっと会いたくてたまらなかった人だった。

「せんせ……」

ネイビーの上質なスーツに身を包んだ悟は、商品開発部のエリアまで歩いてくると足を止めた。

そして、じろりと小春を見やる。

「またこんな遅くまで残業か？ 責任者はどうした」

その厳しい口調に、ハツとする。

咄嗟に辺りを見回したところ、このフロアには他の部署も含めて小春たち以外誰もいないようだ。だが、どこに人の目があるかわからない。

「じゃ、社長、お疲れ様です。その……部長は今日、娘さんの誕生日なので先に帰っていただきました。どうしても残って仕事をしたいというのは、私の我が儘なので」

小春を残して帰ることを最後まで気にかけてくれた部長に、迷惑はかけられない。きっぱり弁明したが、悟は納得のいかない様子でさらに質問を重ねてきた。

「それなら、他の社員が残るべきだろう。こんな時間まで新人社員一人に残業をさせるなんて、何かあつたらどう責任を取る」

「少し前……ほんのちよつと前まで、先輩も一緒だったんです。早く帰れと言われたのに、私が勝手に残っているだけで……あ、でも、私ももう帰ろうと思つてたところだつ」

どうしよう。自分のせいで、先輩や上司に迷惑をかけてしまうかもしれない。前にも注意されたのに、と焦りながら必死に言い訳をする小春に、悟は呆れた様子で小さく息を吐いた。

「……お前は、相変わらずだな」

ぼつりと零された悟の言葉。

「え？」

思わず顔を上げると、小春の顔をじつと見つめる悟と目が合った。しかし、それも一瞬のことで、すぐに視線を外されてしまう。

「もう帰ろうと思つてた、なんてどうせ嘘だろう」

そう言つて、悟は無言で小春の隣の席から椅子を引き寄せて座つた。どうしたのだろうかときよんとしている、突然何かを放り投げられる。慌ててキャッチすると、それはほのかに温かいコーヒーの缶だった。

「カフェオレ……？」

「間違つて買ったから一本やるよ。俺はブラックしか飲まないから」

知つてる、と心の中で頷く。てつきり注意がすんだら出て行つてしまふと思つたのに、なんの気まぐれか知らないがこの場に残つてくれた。もう少し、悟と一緒の時間を過ごせる。

間違つて買ったのが小春の好きなカフェオレだったのは偶然だろうけど、こうして久しぶりに悟と話ができることが嬉しくてたまらない。

「先生……覚えてますか？ 昔、数学の教科担当室で、一度だけコーヒーを淹れてもらったことがあるんです」

「……」

悟は何も言わずに、もうひとつ持つていた缶コーヒーのプルタブを開けた。その姿を見ながら、小春も椅子に座り直してカフェオレのプルタブを開ける。

（あの時の先生、冷蔵庫から購買で買った牛乳を出して、わざわざカフェオレにしてくれたんだよね……）

コーヒーの味は好きだけど、甘くないと飲めないと言つた小春に「お子様だな」と言つて笑つた悟。けれども彼は小春のために、わざわざミルクと砂糖をたくさん入れたカフェオレを作つてくれたのだ。

そんなことを思い出しながらカフェオレを飲んでみると、ふと悟が、小春が開きっぱなしにしてきたパソコンに目を向けた。

「残業の理由はそれか。新しく開発中のアプリ」